

定冠詞が持つ限定表現についての認知言語学的考察

田林 洋一

Consideraciones sobre las expresiones definidas con  
artículo definido desde la perspectiva de lingüística  
cognitiva

Yoichi Tabayashi

Este trabajo tiene por objeto analizar las expresiones con artículo definido a través de la perspectiva cognitiva.

En primer lugar, tiene una visión de conjunto de las investigaciones anteriores sobre el artículo, especialmente 6 investigaciones, de Gili Gaya (1961), Marcos Marín (1980), Bello (1980), Carratalá (1980), Kimura y Nakanishi (2007) y Leonetti (1999).

En segundo lugar, explica las perspectivas teóricas de la lingüística cognitiva y analiza el comportamiento del artículo aplicando la teoría de estructura informativa, metonimia y punto referencial (Langacker, 1993).

En tercer lugar, dividiendo la función del artículo en dos, la referencia anafórica y la no anafórica, estudia el sentido del artículo, especialmente del determinado.

Finalmente analiza el dominio cognitivo al que puede acceder la función del artículo.

En futuras investigaciones, se deberán estudiar las relaciones entre determinantes, pronombres y artículos no sólo del español, sino en comparación con inglés y japonés.

## 1. 序

本稿はスペイン語の定冠詞が持つ限定表現の意味を認知言語学的な立場から考察することを目的とする。まず、冠詞について概略を述べ、先行研究を概観する。その後、基盤となる理論的背景と冠詞を照らし合わせながら認知言語学的な検証を行う。

## 2. 冠詞の概略

冠詞は名詞ないしはその他の一次語（暫定的に、ある語の主要部に出現する語と仮定する）の前に生起し<sup>1</sup>、一種の弱い限定詞として機能するものである。通常、その接辞的性格から強勢が置かれる事のない機能語である。冠詞の文法範疇としては諸々の議論があるが、大別して以下の三つに集約される。

一つは冠詞を独立した品詞として認めるもので、名詞、動詞といった文法範疇に更に新たな範疇が加えられることになる。しかし、基本的に文法範疇の存在は言語に普遍的な性質である必要があり、アドホックな議論と批判される可能性がある。

二つ目はその歴史的発生を重視して、代名詞の下位区分とする立場がある。Jespersen (1933) では定冠詞を指示代名詞、不定冠詞を不定代名詞と規定している。この立場は冠詞の語源的側面からの分類であり、幾多の言語事実を照らし合わせると、冠詞と代名詞は区別されうるべき要素という主張もある。

最後の見方は、冠詞の形容詞的機能を重視して形容詞の一種として捕らえる立場である。Onions (1971) は定冠詞を指示形容詞、不定冠詞を不定形容詞と呼んでいる。

これらのどの立場を取るにしてもそれぞれ利点と問題点が生じるため、一概に優劣を決めることは出来ない。従って、冠詞は現時点では独立して議論すべき問題であり、必要に応じて限定詞、代名詞、形容詞等と比較検討することが適当だと思われる<sup>2</sup>。

定冠詞と不定冠詞は、後続する名詞句を一つの言語単位として表す機能は共通しているが、その指示性は、定冠詞が前方照応的で定性 (definitud) を持つ一方、コンテキストに依存するが、無標の状態では不定冠詞は照応的な機能はなく、定性を持たない。以下の例文を検討する。

- (1) a. Juan no entiende la lengua.
- b. Juan no entiende una lengua.
- c. ?Juan no entiende lenguas.

(1a) の *la lengua* は文脈によって同定できる言語を指し示し、定性を持つ。一方 (1b) は *Juan* がある任意の言語を理解しないという解釈しか持たず、文法的には正しいが語用論的に容認することが難しい言語表現となる<sup>3</sup>。最後に (1c) は、*Juan* が特定の言語や任意の言語ではなく、言語一般を理解しないという解釈になるため、*Juan* は (言語障害等で) 言語そのものが理解できないという解釈になる。更に以下の文を検討する。

- (2) a. *Juan es el estudiante de la UNAM.*
- b. *Juan es un estudiante de la UNAM.*

(2a) は *Juan* は *UNAM* の中でただ一人の定性を持った生徒という意味合いが強く特定化されているが、(2b) では *Juan* は *UNAM* にたくさんいる生徒の中の一人という読み、ないしは *Juan* は職業として学生という分類に入るが、*Juan* の現状を伝達するという読みを持つ<sup>4</sup>。更に以下の文を検討する。

- (3) a. *Una secretaria tiene que saber escribir a máquina.*
- b. *La gallina no es tan tonta como parece.*

山田 (1995 : 89)

山田 (1995) によると、(3a) の *secretaria* と (3b) の *gallina* は総称的な意味を持つが、前者はその種類 (*secretaria* という職業) の代表としてどちらかといえば個に傾斜させて言及しているのに対し、後者はその名詞が示している意味内容の総称ないしは種 (*gallina* という種) 全体を述べているとしている。この見方は冠詞の定性という視野に立てば、それ程特異な現象ではなく、記述的な説明だけでなく意味的な説明も可能である。即ち、不定冠詞を使用している場合は、特定の総称的な見方は薄れ「ある集合から摘出された一個体」として聞き手には未知の情報を提供する。一方、定冠詞を使用している場合には、特定の総称的な見方が強くなり「ある集合それ自体の言及」として、聞き手には既知である可能性がある<sup>5</sup>。

- (4) a. *El profesor de mi pueblo es viejo.*
- b. *Un profesor de mi pueblo es viejo.*
- (5) a. *Tomaré el autobús para ir al centro.*
- b. *Tomaré un autobús para ir al centro.*

山田 (1995 : 102)

山田によれば、(4a)は、町には一人の先生しかいないことが暗に意味されているが、(4b)は町に多くの先生がいることが暗に意味されていて、しかもその先生を特定化したくない時に用いられる、としている。更に、(5a)は「タクシーや地下鉄ではなく、いつものバス」という含意を持ち、(5b)は「(とにかく)あるバス」を含意すると説明される。

(4a)が聞き手に対して全く情報がなく、前方照応的でない場合には上記の説明は妥当性を持つ。しかし、(4a)が発話される前に、既に何らかの形で「町の先生」を言及しているのであれば「町には一人の先生しかいない」という含意は(無標の状況では)なくなる。更に、(4b)が発話された後に *y en mi pueblo no hay más profesor que él.* という文が後続すると、「町に多くの先生がいる」という含意は取り消される。同様の議論が(5)においても成り立つ。

従って、(4)及び(5)における定冠詞及び不定冠詞の使用は、取り消しが可能なことから判断すると、含意の問題ではなく、むしろ既知情報と新情報の区別から議論する方が望ましいと思われる。

以上が定冠詞及び不定冠詞の機能の大まかな見方であり、畢竟、定冠詞はある特定の事物や既知の(話し手と聞き手によって共通の)事態ないしは事物を指し、不定冠詞は聞き手が未知の事態ないしは事物を指すと言える。次節以降では、諸々の先行研究がどのようにスペイン語の冠詞という問題を扱ってきたかを概観する。

### 3. 定冠詞と不定冠詞の先行研究<sup>6</sup>

#### 3.1 Gili Gaya (1961) の扱い

Gili Gaya (1961) は冠詞を「歴史的、機能的に弱い意味を持つ指示代名詞」と定義している。つまり、指示代名詞のように場所を指定するわけではなく、名詞句と独立して出現できないという点で弱い<sup>7</sup>。Gili Gaya の定義では、不定冠詞とは、名詞句によって明示された任意の類の中で、聞き手と話し手が考えられうる如何なる個体ないしは個体の集合を表す、とされる。以下の文を参照。

- (6) a. *Se acerca un caballo.*  
b. *Pasaremos la tarde en un jardín.*

Gili Gaya (1961 : 242)

(6a) の *caballo*、(6b) の *jardín* とも、聞き手及び話し手は馬及び庭にお

ける如何なる個体をも想像することが出来る。即ち、聞き手と話し手の間で、馬及び庭は固定化されておらず、ある任意の事物を指し示していると言うことが出来る。それに対して、定冠詞は聞き手が名詞の指示対象を既に想定<sup>8</sup>していることを示す。

- (7) a. Dame la pluma.
- b. Dame una pluma.
- c. Dame la pluma que está sobre la mesa.

Gili Gaya (1961 : 243)

(7a) はどのペン (pluma) を指しているか、聞き手と話し手で共通の理解があり、(7b) は如何なるペンをも許容する。しかし、(7c) は関係節の付加情報のために聞き手が必ずしも指し示しているペンを理解している必要はない。なお、Gili Gaya や RAE (1973 : 214) は定冠詞の機能として総称的 (genérico) な例 (el hombre es mortal.) を挙げているが、これは同時に不定冠詞の機能 (Una beca de investigación permite trabajar en las mejores condiciones.) としても成り立つ (Leonetti (1999 : 837) 参照)。なお、Hernández Alonso (1970 : 205) では、この種全体を包括する総称的な機能を定冠詞に求めつつ、不定冠詞としても具現化されるという混合的な主張をしている<sup>9</sup>。総称的な指標が表されるのは、冠詞の定不定には関係がない。従って、総称的であるか否かが冠詞の定不定を決定する要因にはならない。

### 3.2 Marcos Marín (1980) の扱い

Marcos Marín (1980 : 235) は、定冠詞 el を actualizador reconocedor、不定冠詞 un を actualizador presentador として、それぞれの機能を区別している。

- (8) a. El hombre era alto.
- b. Ha pasado un hombre.

Marcos Marín (1980 : 235-236)

Marcos Marín は、冠詞 el 及び un に共通する機能として actualizador、transpositores o indicadores de sustantivación の二つを挙げている。即ち、言語表現に喚起し (actualizador)、話し手又は聞き手が名詞を情報として伝達する上で (transpositores o indicadores de sustantivación)、el と un には機

能的な区別はない。しかし、(8)の相違でも見られるように、定冠詞 *el* は「聞き手に再確認させる (*reconocedor*)」機能を持つのに対し、不定冠詞 *un* は「聞き手に提示する (*presentador*)」機能を持つという点で対比がある。これは前節の伝統的な分割とほぼ同一の見解である。

### 3.3 Bello (1980) の扱い

Bello は冠詞の強勢的機能の視点から *el* と *un* の機能的比較を試みている。

- (9) a. Todo un Amazonas era necesario para llevar al Océano las vertientes de tan vastas y tan elevadas cordilleras.
- b. Echaron de ver la borrasca que se les aparejaba, habiendo de haberlas con un rey de Francia.
- c. Una mujer prudente se porta con más recato y circunspección.

Bello (1980 : 259-260)

(9a) 及び (9b) は、ある特定の人物ないしは集合体が既に聞き手にとって既知情報であるにもかかわらず、不定冠詞 *un* が出てくる例である。(9c) は特定の人物を指し示してはいないが、定冠詞とほぼ同様の機能を持ち、定冠詞 *la* と置換可能であるため、名詞に何らかの強調を付与する *una*、と説明される。これに対し、Bello は強調の意味を持ち (10a)、かつ前方照応的に機能する定冠詞の存在 (10b) をも認めている。

- (10) a. El embajador se quejó de no haber sido tratado con las distinciones debidas a un representante de la Francia.
- b. Llena de riquezas y de vicios la ponderosa Roma, dobló su cuello al despotismo.

Bello (1980 : 262-263)

Bello は (9) と (10) の意味的な相違については沈黙しているが、冠詞は定不定を問わず強調を表す機能を持ちうるとの言及がある。従って、強調の有無だけで *el* と *un* の差異を図ることは出来ない。

### 3.4 Carratalá (1980) の扱い

Carratalá (1980) は冠詞を代名詞の一種として位置づけ、定冠詞 *el* と不定冠詞 *un* の機能的相違を説明している。Carratalá は冠詞を形容詞的代名詞と命

名し、その機能は属性 (función atributiva) を表すのみと主張した<sup>10</sup>。

- (11) a. Un bien conseguido cuadro de costumbres...  
b. El infinitamente pequeño universo de las amebas.

Carratalá (1980 : 246)

(11)の冠詞はそれぞれ、属性的な機能を持つという点では共通するが、(11a)では *cuadro* が具体的に聞き手にとって特定される事物ではない。一方、(11b)は *universo* が定冠詞 *el* によって限定されている。両者は前置詞句が後続するために聞き手にとってある程度限定されているが、(11a)は限定された集合体から如何なる *cuadro* を取ってきても容認可能であるのに対し、(11b)の *universo* は聞き手にとって、ある限定的な事物を指し示していなければならない。なお、Carrataláは定冠詞 *el* と不定冠詞 *un* は平行関係にあり、二項的な変項として扱っている。この分布の相違については、本稿では詳しく取り上げないが、総じて正しい主張であるように思われる。

### 3.5 木村・中西 (2007) の扱い

木村・中西は、以下の文から *el* と *un*、更に冠詞ゼロの比較について描写している。

- (12) a. Si tomo café por la noche, no puedo dormir.  
b. Si tomo el café por la noche, no puedo dormir.  
c. Estoy tomando un café.

木村・中西 (2007 : 56)

木村・中西は *café* のような物質名詞が直接目的語になっている場合、それが限定・特定された名詞でなければ無冠詞 (12a) になるとしている。(12b)は定冠詞 *el* の存在により、「聞き手が知っている、例のコーヒー」という意味合いが付与されるため、「夜にコーヒーを飲むと眠れない」という文のスペイン語訳としては不適當として *mal* の評価を与えている。しかし、筆者が複数のインフォーマントに聞いたところ、(12b)は必ずしも不適當ではなく「ああ、あのコーヒーは濃いからね」などの語用論的文脈が想定される文ではむしろ(12a)よりも適格と判断している。木村・中西は一般的な意味でのコーヒーという語用論的に無標な状況で発話された場合、(12a)の方が的確であると述べているだけで、(12b)については前述の言及以外していない。従って、本稿は木村・

中西の説を否定するものではない。

木村・中西は、(12c) は una taza de café の意味で un café ということが出来る、と説明している。語用論的に有標な (12b) と比較すると、特定性の有無がそのまま el と un の分布を決定しているように思われる。

### 3.6 Leonetti (1999) の扱い

Leonetti (1999) は不定冠詞 un が強勢を持ちうることで代名詞的な役割を果たすとして、定冠詞 el と区別する<sup>11</sup>。つまり、el は un よりも接辞的な機能を持ち、un はある任意の意味を指し示すのに対し、el は任意的な意味を持たず、前方照応的である。任意の un はしばしば総称的な un と同一視されるが、今までの先行研究で見てきたように、総称性を表す際に un と el は機能的な差を見せる。Leonetti は、el にも総称的機能を認めた上で、任意性と総称性はしばしば同意であるとする。

(13) a. Un lince es un felino.

b. El lince es un felino.

Leonetti (1999 : 837)

(13) はある特定の種を新しく表現しうるため、基本的に等価である。即ち、総称的な機能は両者とも持ちうる。

Leonetti は他の先行研究と同じく、定冠詞 el は聞き手にとって復元可能であり、言及対象を表示する機能を持つ一方、不定冠詞 un はいかなる意味でも聞き手に言及対象を指向させることは出来ず、存在を示すという点で量的であるとする。即ち、不定冠詞 un はある言及された集合体から任意の要素を摘出できるのに対し、定冠詞 el にはその機能がない。従って、el libro de cocina と発話された際に、聞き手はそれが具体的にどの本であるかを解釈できる、ないしは(どの本であるかの) 指向的解釈を強いられるが、un libro de cocina と発話された時は、聞き手は単に集合体[libro de cocina]からある一冊の本だけを摘出したとだけ理解すればよい。即ち、定冠詞 el は聞き手にとって既知情報、ないしは語用論的に指向が推論できなければならないが、不定冠詞 un は聞き手にとって新情報であり、指向を推論することを要求されてはいない。言い換えると、el に後続する名詞句が集合体ないしは量的であっても全体としてその全てを指し示すことが出来るが、un にはその機能がなく、後続する名詞句が集合体の場合には、そのうちの一つのみが摘出され、残りは破棄されねばならない。その意味で、前者は包括的言及 (referencia inclusiva)、後者は排除的



言及 (referencia exclusiva) ということができる。

語用論的に既知情報であるという点は、以下を参照。

(14) a. La película se ve con agrado, aunque el guión no sea muy original.

Leonetti (1999 : 797)

b. \*?La película se ve con agrado, aunque un guión no sea muy original.

(14a) の el guión はその前に既に言及されている La película から語用論的に推論することができ「シナリオはその映画のものである」という前方照応的解釈が可能である。つまり、シナリオと映画は語用論的に密接に関連付けられているため、たとえ前に出てきた文に guión という単語が含まれなかったとしても、聞き手は guión が película と関連し、前方照応的機能として定冠詞 el の出現を許す。一方 (14b) はシナリオと映画は密接に関連するという語用論的推論を破り、un guión が出現しているために有標的な解釈を聞き手に強いる。即ち、シナリオは (既に提示された) 映画とは全く関係がなく、独自に量化的な解釈をしなければならない<sup>12</sup>。

要約するならば、不定冠詞 un は存在を断言しているのに対し、定冠詞 el は存在を前提としている (Leonetti, 1999 : 841) と言える。しかし、この説明は冗長的である。定冠詞の機能が既知情報を担うということは、必然的に言及された対象としての存在 (実際に存在しているか否かは関係がない) を前提とする。従って、既知情報の機能を担う要素は、基本的に存在に関する言及を前提としている。一方、不定冠詞の機能が新情報を担うということは、如何なる表現であれ量化的な性質を持ち、存在の有無自体を言及する。従って、新情報の機能を担う要素は、基本的に存在の有無を断言する。換言するならば、Leonetti の主張は定冠詞 el が既知情報、不定冠詞 un は新情報という定式に要約される。

### 3. 認知言語学的な理論背景

先行研究のほとんどは基本的に情報構造の立場から議論されたものであり、既知情報→定冠詞、新情報→不定冠詞という図式が成り立つ<sup>13</sup>。本稿では認知的な情報処理に基づくアルゴリズムから限定表現を分析したい。

限定表現は (裸 (bare) 名詞を含めた) 名詞句で表され、その談話での基本的機能は新しい要素を導入すること (不定表現) と、既に導入された要素を同定すること (定表現) である。(15a) の a book と (15b) の最初の「本」は前者、(15a) の the book と (15b) の最後の「本」は後者である。

(15) a. I ordered a book a month ago and the book finally arrived yesterday.

b. 私は本を一ヶ月前に注文したが、本はやっと昨日届いた。

坂原 (2000 : 214)

スペイン語、英語など定冠詞と不定冠詞を持つ言語では定表現と不定表現の区別が比較的明確であるが、日本語のように冠詞がない言語では、定表現は裸の名詞句を通して文脈に応じて語用論的に決定される。

こうした談話理解において、用いられる知識ベース（談話資源）は、一般的知識（百科事典的知識）、発話状況についての知識（語用論的知識）、先行の談話についての記憶、の三つに大別される。発話された言語データは談話資源を用いて処理され、処理されたデータは談話記憶に加えられる。談話記憶は新たに言語の知識ベースに組み込まれ、更なる言語データの処理に用いられる。これらの談話資源全てが発話の際に用いられるわけではなく、予想される話題に応じて関与的な知識のみがアクセス可能な状態に置かれる。認知的アルゴリズムから見ると、ある不定冠詞表現  $n$  は談話記憶に新しい要素  $n$  を導入せよとの指示であり、定冠詞表現  $N$  は（もしあれば）談話資源内の要素  $N$  を同定し、もしそうした要素が談話資源内になれば、発話状況あるいは活性化された知識内で対応する要素を同定して、それを談話記憶にも登録せよとの指示である。

#### 4. 同定表現

##### 4.1 前方非照応関係

さて、定冠詞表現  $N$  の同定が最も容易になるのが、カテゴリー  $N$  に属する個体が談話資源の中に一個しか登録されていない場合である。

(16) Sale el sol por la izquierda.

(16) の定冠詞表現  $el\ sol$  は世界中に一つしか存在しないため、同定が可能である。この用法は、指示対象の同定に必要なパラメーターが、一般的知識から推測できる場合である。しかし、登録された要素  $N$  が複数であっても、発話状況依存的に指示対象が確定されると同定可能なケースがある。

(17) Cierra la puerta.

(17) の *la puerta* は話し手と聞き手のいる部屋にドアが一つしかない場合に同定可能となる。この用法では、発話状況が値決定のパラメーターとなっている場合である。また、仮にドアが複数ある場合でも、開いているドアが一つしかない場合には同様に同定可能となる。命令文や依頼文には、その命題が実行可能でなければならないという前提が（基本的に）存在する。従って、この用法では値決定が行われるのは「閉めることのできるドア」であり、発話状況が値決定のみならず、唯一の指示対象を表す。この指示対象は言語外的なものであり、同じ状況で (18) のような表現では、指差しなどの言語外的な情報が与えられない限り、同定は不可能となる<sup>14</sup>。但し、(18) が発話された状況で部屋にドアが一つしかない場合は同定可能となる。

(18) *Mira la puerta.*

更に、発話状況で得られた定冠詞表現が総称的にカテゴリー全体を表す場合がある。この用法では、定冠詞表現は値決定に如何なる貢献もしておらず、総称的な用法、即ち名詞句の役割そのものを決定する。これは日本語の裸名詞句や英語の定冠詞表現にも見られる。

(19) *En un hospital, la enfermera ayuda al doctor.*

(19) の *la enfermera* 及び *el doctor* は、特にどの個体を指しているわけではない。この用法は英語では定冠詞表現や *nurses assists doctors.* のように複数を表わす裸名詞句で見られるが、スペイン語では複数を表す裸名詞句がその役割を果たす。また、日本語には冠詞がないので常に裸名詞句である。

(20) a. *In a hospital, the nurse assists the doctor.*

b. 病院では、看護婦は医者を助ける。

c. *En un hospital, enfermeras ayudan a doctores.*

以上の4つの用法は、定冠詞表現でありながら全て非照応の場合に適用されるものである。しかし、英語とは異なりスペイン語は、(20) が示すように定冠詞を伴う名詞句でなくとも（複数形を用いることによって）定冠詞表現と同じ機能を果たすことがある。

#### 4.2 前方照応関係

照応には同一指示 (21a) と非同一指示 (21b) がある。この非同一指示とは、語用論的に既知情報であることと同義である。

- (21) a. Compré una novela. Leí la novela anoche.  
b. Compré una novela. Leí el capítulo I anoche.

(21a) に出現する *novela* は明示的に同一指示表示を持ち、二つの名詞句は同じ指示対象を表していることが分かる。一方、(21b) で表される *el capítulo I* は先行する名詞が同一指示で出現しておらず、語用論的に *novela* に含まれる情報から「小説の中にある第一章」という一般的知識を導き出して照応関係を築く。語用論的推論は連合照応、橋渡し推論や間接的照応などとも呼ばれることがある<sup>15</sup>。

この照応関係は、いわゆる近接関係におけるメトニミーという分析も可能である。即ち、小説には少なくとも第一章が存在するという一般的知識による推論が成立する他に、小説の中には物理的に第一章が存在し、それが近接関係によるメトニミー的な推論として成立する。ここで重要なのは、小説 (*una novela*) も第一章 (*el capítulo I*) も同じ概念領域にあり、単一の領域内における近接性に基づいているという点である。従って、定冠詞表現は単一の領域内の推論から導き出された要素であり、他の概念領域からの産物ではない。このことは、定冠詞の意味が単一の概念領域から生み出されたということも同時に意味する。

メトニミーと似た分析方法として、パートニミー及びトポニミーの認知による分析方法が存在する (山梨 (1995 : 35))。一般に、照応表現が問題にされる場合は先行詞が明示的に把握できることが多い。しかし、以下の文は問題の照応詞に直接対応する先行詞が明示的に存在しない。

- (22) a. The phone rang. Kugelmass lifted it to his ear mechanically.  
(Woody Allen, *The Kugelmass Episode* : 26)  
b. The phone rings again. I pick it up. "Wouldn't I love to be in Key West with you?" Johnny says. "Wrong number," I say.  
(Ann Beattie, *The Burning House* : 234)

後続の代名詞 *it* が受けるのは電話機としての *phone* ではなく、その一部として存在する受話器である。これは近接の関係以上に、全体から部分への認知プ

ロセスがかかわるパートニミーが、先行詞と代名詞の間に成り立っていると考えることができる。この時、常に先件が後件よりも大きな認知要素を持つ必要はない（(21) は先件の *novela* の方が後件の *el capítulo I* よりも大きい、それはパートニミーから来る制約ではない）。

(23) There is an Ohio license in front of us. Ma, have you ever been to Ohio?

(Thornton Wilder, *The Happy Journey to Trenton and Camden* : 73)

先行文の *Ohio license* はオハイオ州のナンバープレートではなく、オハイオ州のナンバープレートを付けた車を意味する。ナンバープレートは車よりも認知的に小さいターゲットであるが、部分から全体への拡張的处理が適用される。

トポニミーは場所関係に関するメトニミーである。即ち、「第一章」は「小説」の中に組み込まれているものであるが、空間的位置は「容器」と「内容物」の関係に当たる。これらも照応が可能な例である。

(24) 鍋を食いかけたが、うまくないので[それを]/[ø]猫にあげてしまった。

山梨 (1995 : 37)

(24) の「鍋」は正確には容器を表すのではなく、鍋の中に入っている食物を指す。そして、後件の「それ」は「鍋の内容物」を適切に照応関係におさめることができる。従って、トポニミー的な認知関係も照応関係を成立させることになる。この時、後件に出現する照応表現は基本的に定表現となる。定表現の出現先は、後件のみの独立的存在ではなく、先件からの照応の結果によるものである。

更に、語用論的な照応関係は参照点によって成立する場合もある。即ち、参照点を *novela*、ターゲットを *el capítulo I* として、実際に読んでいるのは小説ではなく、具体的には小説の中の第一章という考え方である。参照点とは際立ちが大きいものから小さいものへのアクセスを補償する機能であるが、ターゲットも参照点も話者の認知的支配領域内 (*cognitive domain*) の中になければならない。従って、以下は非文となる。

(25) \**Leí el capítulo I ayer y leo una novela hoy.*

(25) が非文の理由の一つは、第一章 (*el capítulo I*) の認知的支配領域に

小説 (una novela) が入っていないため、もう一つは定冠詞表現の認知的支配領域に不定冠詞表現が入っていないためである<sup>16</sup>。これらのいずれの分析を採用するにせよ、novela を牽引として、el capítulo I が導き出される構造に直接的な変化はない<sup>17</sup>。

さて、(21a) の同一指示は、先行する名詞句が後に現れる名詞句よりも情報が少なくならなければならないという特徴がある。

- (26) a. ?Compré una novela. Leí la novela interesante anoche.  
b. Compré una novela interesante. Leí la novela anoche.

(26a) に出現する名詞句 novela は、後続する文に出現する la novela interesante のように情報量が増える場合には容認度が下がる。坂原 (2000 : 221-222) はこの問題を (27) の例文と (28) の例文から、以下のように説明する。即ち、(27a) のように照応表現は先行詞に含まれない情報を持つことはできないが、(27b) のように照応表現が先行詞より少ない情報しか持たないのは問題がない。そして、(28) は最初の文から John が犬を飼いつけることができなくなったと推論でき、二番目の文で前文が設定した「飼い犬を処分する」というフレームでブランクになっていた原因スロットを埋めるのにぴったりの情報を与えるとするものである。

- (27) a. \*I see a rose. The red rose is lovely.  
b. I see a red rose. The rose is lovely.  
(28) John will have to get rid of his dog. The crazy beast has started to terrorize the neighbourhood children.

坂原 (2000 : 221)

更に坂原は続けて、(27a) が非文の理由は、言語的に設定されるフレームが貧弱すぎて、照応表現だけにある red という情報が、このフレームの中に適切に位置づけられないからだと説明する。しかし、ここでは情報フレームにうまく情報のはめ込まれるかどうかという問題よりも、むしろ参照点構造からの分析の方が納得できる説明が期待できる。即ち、(27a) で提示された不定冠詞表現 a rose は、二番目に出現した the red rose を二つの意味で認知的支配領域の外に置く。一つは新たな認知領域 red であり、最初に提示された文では red という意味は認知的支配領域に用意されていない。もう一つは定冠詞表現 the であり、やはり最初に提示された文では定性の意味は rose にはない。従って a

rose は認知支配領域の外に置かれることになり、アクセスが不可能となる。一方、(28) の his dog が The crazy beast と同定可能なのは、「飼い犬を処分する」という文全体が既に The crazy beast という意味を導き出すのに十分な情報を与えているからである。即ち、his dog が単独で与える認知支配領域には The crazy beast は置かれていない。しかし、前文で提示された get rid of his dog という認知支配領域が The crazy beast を適格に捕らえているため、his dog と The crazy beast は同定されることになる。

この同定に際し、定冠詞は特別な力を持たない。即ち、定冠詞があるから同定可能になったわけではなく、同定がなされた結果として定冠詞表現が出現しているという点で、定冠詞の意味は結果的である。

#### 5. 定冠詞表現のアクセス可能範囲

以上の議論から、不定冠詞は言語データ記憶に新しい要素を導入するという指令であり、定冠詞句は一般的知識、発話状況、談話記憶のどの領域にある対象も指し示すことが可能となることが明らかとなった（一般的知識及び発話状況については前項を参照。談話記憶については田窪（1992）が詳しい）。即ち、定冠詞表現は不定冠詞表現や代名詞表現などと比べ、認知的に融通のきく表現である。定冠詞表現が融通のきく表現であるとは、一般的知識、発話状況、談話記憶の全ての領域にアクセス可能というだけでなく、指示詞や代名詞表現を持つ発話状況への留保条件的アクセスも同時に包括するということである。

(29) Un hombre ha llegado al hotel. Ese hombre / Él / El hombre (\*la) ha pedido la llave / \*esta llave.

(29) の Un hombre は後件では指示詞 Ese hombre、代名詞 Él、定冠詞表現 El hombre のいずれの表現も容認可能である。ところが、先件で出現した el hotel を受けて「鍵」を表す場合には、定冠詞表現の la llave のみが許され、指示詞 esta llave、代名詞表現 la は容認されない（なお、文法的特性上、代名詞表現の出現個所は動詞の前に表示してある）。このことは、定冠詞表現では許される表現が、指示詞や代名詞表現では許されないことを表している。

定冠詞表現が認知的にアクセス可能な領域が広いということは、別の面では対象物の同定に不利になることがある。即ち、代名詞表現や指示詞では明示的に対象物を同定する（即ち照応関係が明確になる）のに対し、定冠詞表現では曖昧になることがあるということである。

- (30) a. El hombre ha pedido la llave y la ha usado.  
b. El hombre ha pedido la llave y ha usado esta llave.  
c. El hombre ha pedido la llave y ha usado la llave.

ここでは指示の冗長性は問題にしないことにする。さて、(30a) 及び (30b) で、後件で使用された「鍵」は前件に出現した *la llave* であるが、(30c) では必ずしも前件に出現した「鍵」を意味しない。たまたま当該の *hombre* が部屋に合う別の適当な鍵を持っていたとしても、(30c) は成立する。従って、坂原 (2000 : 240) の言葉を借りるならば「定冠詞は指示対象に対して、あまり独創的なカテゴリー化は行えない」ことになる。

## 6. 結語

本稿では、定冠詞表現の持つ限定表現の認知的な考察を概観した。まず、先行研究として6つの代表的な論考を取り上げ、その紹介を行った。次に、先行研究では情報構造からのみに終始していた説明原理を、認知的な考察、具体的には情報処理、メトニミー的推論や参照点といった道具立てで分析した。更に、照応的な関係と非照応的な関係の定冠詞表現についてそれぞれ独自に考察を行った。最後に、普遍的に定冠詞がアクセスしうる認知領域を概観した。

代名詞や指示詞といった他の照応表現の他、日本語や英語などにおける定表現の限定に関する比較考察を今後の課題とする。

## 参考文献

- Alarcos Llorach, E. (1984) *Estudio de gramática funcional del español*. Editorial Gredos.
- Bello, A. (1980) *Gramática de la lengua castellana*. EDAF, S.A.
- Carratalá, E. (1980) *Morfosintaxis del castellano actual*. Editorial Labor, S.A.
- Fauconnier, G. (1994) *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge University Press.
- Gili Gaya, S. (1961) *Curso superior de sintaxis española*. Biblograf, S.A.
- Hernández Alonso, C. (1970) *Sintaxis española*. Valladolid.
- Hernández Alonso, C. (1984) *Gramática funcional del español*. Editorial Gredos.
- Jespersen, O. (1933) *The System of Grammar*. George Allen & Unwin.



- 木村琢也, 中西智恵美 (2007) 『中級スペイン語作文コース』 同学社.
- Langacker, R. (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1), 1-38.
- Leonetti, J. M. (1999) "El Artículo". en Bosque, I y Demonte, V (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española. Vol. 1.* 787-890. Espasa.
- Marcos Marín, F. (1980) *Curso de gramática española.* Editorial Cincel, S.A.
- 大堀嘉夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会.
- Onions, C. T. (1971) *Modern English Syntax.* Routledge & Kegan Paul.
- RAE (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española.* Espasa.
- Rivero, María L. (1977) *Estudio de gramática generativa del español.* Cátedra.
- 坂原茂 (2000) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知言語学の発展』 213-249. ひつじ書房.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学』 96-106. 三省堂.
- 辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.
- Taylor, J. R. & 瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』 大修館書店.
- 山田善郎監修 (1995) 『中級スペイン文法』 白水社.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房.

<sup>1</sup> 「名詞の前」という表現は言語の線状性に立脚するものであり、構造的な定義ではない。構造的、特に生成文法の観点からは「冠詞は *determinant phrase* (DP) の主要部に位置し、その補部に名詞句が生起する」と規定されよう。しかし、フィンランド語やポーランド語など冠詞そのものが文法的に存在しない言語では、そもそも DP の主要部に音形のある要素が出現することはなく、個別言語次第では主要部が常に空の状態で置かれることになる。従って、「冠詞は名詞句の指定部に生起しうる一要素であり、生起するかどうかは各言語のパラメーターに依存する」と考えた方が正しいように思われる。

<sup>2</sup> スペイン語の *un* はその歴史的性質により、どの品詞で扱われるかで議論が分かれる。Gili Gaya (1961) は冠詞としての機能を重視している一方、RAE (1973) は *un* を数詞の一つとみなしている。Leonetti (1999 : 835-836) は、代名詞としての *uno* は認めない一方、数詞としての *uno* と不定冠詞の *uno* は証拠不十分として、明確な区別をしていない。

<sup>3</sup> (1b) は「如何なる言語も理解しない」という解釈を持つ可能性もあるが、その研究は今後の課題とする。

<sup>4</sup> *Juan es estudiante de la UNAM.* という無冠詞になると、職業を言及する。

<sup>5</sup> ここで「可能性」と記したのは、聞き手が *gallina* という種そのものを知らなかった場合、既知とは呼べなくなってしまうからである。それでも「背景知識に基づいた総称体系」としての集合は機能しているので、単一性を持つ。例えば、太陽を知らない子供に対しても、スペイン語話者は *el sol* とその子供に向けて発話する。

6 ここでは紙面の都合から、6つの先行研究を挙げるに留める。更なる先行研究として、Alarcos Llorach (1984: 223-234)、Hernández Alonso (1984: 450-456)、Rivero (1977: 140) 等が挙げられる。特に Rivero は、存在的な価値を持つ un と想定的な価値を持つ el との対比を意味論的に説明している点で興味深い。

7 この見方は冠詞の名詞省略という点を考慮に入れていないが、機能的な強弱という観点から見ると、冠詞、特に定冠詞は確実に前方照応的に明示された名詞句が必要であり、例え後続する名詞句の省略で一見冠詞が独立しているように見えても、実際の機能は先行した名詞句その他のカテゴリーに依存するのは間違いない。

8 定冠詞は聞き手に「想定」を強いるのに対し、不定冠詞は聞き手に「存在」を強いる。詳しい議論は Leonetti (1999: 839) 参照。

9 Hernández Alonso (1970: 205) は、El hombre es un animal racional. は cada hombre... と等価であると指摘する。即ち、総称的に用いられた定冠詞は不定冠詞の特徴である集合体からの任意の抽出 (cada) の機能を持ちうるということである。

10 Carratalá (1980: 246) は、冠詞は形容詞的代名詞と違い、核的な能力を持たず、独立して存在できないとしている (核的な能力の欠如は、畢竟独立して存在し得ないことと同義である。なお、ここで核的としているのは、冠詞には主要部になる可能性はあるが、それが単独で文中に現れ得ないという意味においてであろう)。そして、唯一独立的といえるのが本文中の (11) としているが、これだけで冠詞の自律性を証明するのは無謀のように思える。何故なら、(11) における冠詞は、どちらも後続する名詞を欠いては存続できない。従って、本稿では冠詞の自律性については否定的な立場を取る。

11 Leonetti (1999: 835-837) は un を代名詞とみなしてはいない。また、数詞としての uno と不定冠詞の uno / un を区別しないことから、un は冠詞の中でも特殊な位置を占めるという解釈で議論を進めている。

12 定冠詞と不定冠詞は量化的な意味合いから否定の作用域にも影響を及ぼす。

(i) a. A esas horas no pudieron encontrar un taxi. (=ningún taxi)

b. A esas horas no pudieron encontrar el taxi. (≠ningún taxi)

(i a) は un の存在的機能により、タクシーが存在していることそのものを否定しているために量化子 un は否定語 no の作用域よりも小さく、結果として ningún taxi の読みが成立する。一方 (i b) は el の前提的機能により、タクシーが存在していることを前提として、ある特定のタクシーのみが見つからない、という解釈になる。従って、定冠詞 el の量化的機能は否定語 no の作用域よりも大きい (しかし、前方照応的な意味での el は否定語の作用域に入る)。

13 既知情報としての定冠詞と新情報としての不定冠詞の用法については、特定の (específico) 解釈と混同されがちである。不定冠詞にも特定の解釈と不特定の解釈が存在することについて、以下の文を参照。

(i) Ursula wants to marry a millionaire.

Taylor・瀬戸 (2008: 54)

(i) の文には以下の二つの解釈がある。①特定の億万長者がいて、ウルスラは彼と結婚したがっている。しかし、話し手はその億万長者を同定できず、聞き手も同定していないと想定している (不定冠詞の特定解釈)。②ウルスラはまだ特定の億万長者を見つけておらず、単に億万長者がいれば、誰であってもその人と結婚したいと思っている (不定冠詞の不特定解釈)。この二つの違いは、「億万長者」を受

ける代名詞が異なることで明示的になる。

(ii) a. Ursula wants to marry a millionaire. She met him at the casino.

b. Ursula wants to marry a millionaire. She hopes to meet one at the casino.

(ii a) の *millionaire* は特定の解釈のため、後続する文では代名詞 *him* で受けることができる。(ii b) の *millionaire* は不特定の解釈のため、後続する代名詞では *one* で表現される。

このことは、不定冠詞が特定の解釈と不特定の解釈の二つの意味を持つということではない点に注意する必要がある。即ち、以下の文に出現する *millionaire* は、過去に起こった出来事のために特定の解釈しか存在しない。

(iii) Ursula married a millionaire.

特定の解釈と不特定の解釈については Leonetti (1999)、この現象をメンタルスペース理論から扱った研究として、Fauconnier (1994) などを参照のこと。

14 指差しなどの場合では、定冠詞ではなく指示形容詞を使うのが一般的である。

(i) Mira esta puerta.

しかし、定冠詞でも同様の機能を持つことを考えると、(18) は必ずしも非文とは呼べない。

15 坂原 (2000 : 222-223) は (i) の例文で、最初の文が本の「フレーム」を導入すると説明する。フレームとはここで述べる一般的知識の摘出とほぼ同義である。この時、日本語の裸名詞句と英語の定冠詞句は意味的に対応する。

(i) a. I read an interesting book. The author is a good friend of mine.

b. 私は面白い本を読んだ。著者は私の親友だ。

16 参照点とターゲットが認知的支配領域に入らなければならない言語表現として、代名詞が挙げられる。

(i) a. Microsoft, it's always giving me trouble.

b. \*It, Microsoft's always giving me trouble.

辻 (2002 : 89)

(i a) は Microsoft が参照点として機能し、その認知的支配領域に代名詞 *it* を置いているので適格である。一方、*It* を先行させた (i b) には Microsoft を認知的支配領域におくことができない。その他、所有形容詞なども参照点の道具立てを使って説明される。詳しくは Langacker (1993)、辻 (2002) 他を参照。

17 より厳密に述べるならば、読まれているのは小説の中の第一章に出現する文字や文である。この細密度の変化は人間の認知能力がどの程度のレベルにまでアクセス可能かという問題とも関連する。詳しくは大堀 (2002) 他を参照。